

上野天神祭：西町

西町の「しるし」のデザインは羯鼓で、古代中国の民話から取られている。人々が彼らの支配者に不満を抱いたときはいつでも、彼らは太鼓を打って抗議したという。彼らが統治者に満足し、国が平和になったとき、立派な雄鶏が太鼓の上にとまった。このようにして、太鼓の上の雄鶏は世の中が全て平和である証となった。羯鼓は豊かな布地と装飾に包まれ、1863年に作られて以来、西町の人々に幸せをもたらすシンボルとなった。

「だんじり」の名前である花冠は「花輪」を意味し、踊り手が着る衣装の一部に由来する。「だんじり」の天幕には、定型化された草に囲まれた多くの伝説の獣や霊獣が描かれている。水引幕には、晋時代（266～420）の絵画、曲がりくねった小川の畔で宴会をしている貴族の様子を描いた「蘭亭曲水の宴図」の刺繍複製品が飾られている。

「だんじり」の正面は宮殿を模して作られており、欄干は宝珠で飾られ、手作りの金具で装飾されている。これらのきらびやかな装飾は、中ほどまで降ろされた簾に囲まれている。簾は一般の人々が貴族を直接見ることが防ぐためにしばしば使用された。簾の間に座れる人々は名誉であった。